

第9回研究例会

概要

2023年度のユーラシア歴史文化研究班の活動は、第4回KU-O-R-C-A-S研究例会が初めてであった。ユーラシア歴史文化研究班では、文書や碑文など、非典籍史料を利用したユーラシア史研究をテーマにしている。今回の研究例会では、毛利英介研究員が遼寧省北鎮一帯で出土した遼代の石刻史料、特に墓誌をとりあげ、その概要と問題点を報告した。吉川和希研究員はベトナム・黎朝期の行政文書などを利用し、国家祭祀について報告を行った。森部豊主幹・研究院は、唐代の墓誌や銅鐘銘文を利用し、唐後半期の軍制研究の展望について報告を行った。(主幹研究員／森部 豊)

発表要旨

「中国遼寧省北鎮市出土遼代墓誌銘群に関する初歩的研究」

中国遼寧省北鎮市は歴代中華王朝の国家祭祀の対象となった北鎮(=医巫閭山)を祀る北鎮廟の存在で有名だが、遼代には顕陵(東丹王・世宗皇帝父子を埋葬)・乾陵(景宗皇帝・承天皇太后夫妻を埋葬)という複数の皇帝陵を擁する特別な地であったことが特徴である。遼代の皇帝陵としては、内モンゴルに位置する慶陵が戦前からの発掘調査により著名である。それに対して北鎮所在の皇帝陵は相対的に等閑視されて来た。それが2010年代から一帯の発掘調査が展開された結果、近年多くの陪葬墓が発見され墓誌銘も出土している。今回はそのような墓誌銘の中から「耶律宗教墓誌銘」(本墓誌銘の出土は1990年代にさかのぼる)と「韓徳讓墓誌銘」のそれぞれ一部分の記述に注目し、検討を行った。具体的には、前者の「渤海聖王」と後者の「猶子之誠」である。そして「渤海聖王」は遼における渤海認識の検討において、「猶子之誠」は遼の対宋関係とそこでの承天皇太后の位置づけの検討において重要な記述であることを指摘した。(研究員／毛利英介)

「ベトナム黎鄭政権の国家祭祀の変遷」

17～18世紀の北部ベトナムでは黎朝朝廷が形骸化、鄭氏が王府を開設し、独自の政権を構築していた(黎鄭政権)。黎鄭政権の統治の実態については一定の研究蓄積があり、たとえば黎朝の支配機構に代わり鄭王府の官吏が徴税に当たっていたことが指摘されている。ただし、あらゆる面において鄭王府が黎朝朝廷に取って代わったのか否か、十分には解明されていない。そこで本発表は国家祭祀に注目し、従来使用されてきた典籍史料に加えて行政文書(の写し)などの非典籍史料も活用しつつ、以下の新事実を解明した。(1)黎鄭政権では、南郊・太廟(黎朝の宗廟)・宮廟(鄭氏の宗廟)・孔子が「四尊」と呼称されている。(2)1720年前後の礼番の設立と調銭の施行により、各種国家祭祀を鄭王府が実質的に管轄できる条件が整った。実際それ以後、鄭王府による南郊祭祀の代行(1724、1776年)や孔子像の「司寇像」から「袞冕像」への転換(1755年)などがおこなわれた。(3)形式上太廟と宮廟は共に「四尊」だが、供物の量や皂隸の数の面で宮廟が厚遇されていた。(研究

員／吉川和希)

「青梅社鐘から見る唐後半期の「府兵制」

本報告は、1986年にベトナム・ハノイから出土した「青梅社鐘（タインマイの鐘）」銘文を手掛かりとし、唐代後半期の「府兵制」の実態に関し、今後の展望を試みた。青銅製の青梅社鐘は、唐の貞元十四（798）年に鑄造・奉納されたもので、この鐘の製作に関係した「随喜社」という仏教信仰団体（社）構成員53人と鐘の鑄造に参加した施主、合わせて243人の名前が鑄刻されている。そのうち、34人が唐朝の軍職である折衝府の官職を持っている。これらの人々は、ベトナム北部に居住する人々であるが、34人が帯びた折衝府官は、中国北部の山西省と陝西省に置かれていたものが半数以上を占める。また、折衝府の、もともと唐代前半期に農民を徴兵し、軍事訓練を施し兵士とし、都の警備に送りこむ役割を持っていたが、この鐘が鑄造される半世紀ほど前の749年に、すでにその役割が停止されていたものである。では、この折衝府官は何を意味するのだろうか。実は典籍史料、墓誌などを精査すると、749年以降でも折衝府官を帯びる人の存在をいくつか確認することができる。それらに対し、様々な見解があるが、史料の分析を経た実証的なものではない。本報告は、ベトナム北部に籍を有する者が中国北部の折衝府官に任じられていることを重視し、唐後半期においても、何らかの形で折衝府の機能の一部が、藩鎮体制下で残っていたのではないかという見通しを述べた。（主幹研究員／森部 豊）